

「わかる」ということの多層性について(Ⅲ)

——弁証法的な身体の現象学の立場からの基礎的考察——

矢 谷 慈 国

On the Multiplicity of Understanding (Ⅲ)

: A fundamental study from the dialectical phenomenology of Body

Yoshikuni Yatani

第四章 科学以外的生活世界あるいは非歴的、普遍的、形式的、不変的な人間存在の生きられた体験の基本構造の分析から導き出される、「わかる」ということの多層性のまとめ。

前稿¹⁾(Ⅰ)²⁾(Ⅱ)，で述べてきたことは、「わかる」という現象の最も基本的な「生きた身体をもって世界の中で他者と関わりつつ生きる人間の体験における連続と分節」の領域に関してであった。それは人間の生きられた体験に即して、その構造を「弁証法的な身体の現象学の立場」からする、本質論的、普遍的、形式的分析の試みであって、個別の社会文化的内容における「わかる」ということの諸相については次稿以下で取り扱う予定である。

本稿では前の二つの論考をふまえて、その範囲で「わかる」という現象についての要約的命題を整理すると共に、「わからない」という問題をそれぞれの命題に対応させて論じておきたい。

I 「わかる」とは、最も一般的には、発生論的にも構造論的にも「わかつてぬ」「わかれぬ」「わけられぬ」未分化連続の体験を前提として、その体験の主体である人間が、意識下の身体レベルであれ、意識レベルであれ、言語化以前のレベルであれ言語化のレベルであれ、自らの連続の体験に能動的に分節を課す、あるいは受動的に課されることによって、一つの体験を他の体験から区別し、差異化すること、「分けること」「分節すること」である。

したがってこのレベルでの「わからない」とは、「わかる」「分節する」以前の生きられた連続の体験ということになる。

このレベルでの人間の体験の連続と分節に関しては、前稿(Ⅰ)(Ⅱ)で述べたように、むし

る連続の体験を自覚化することが重要であり、そのためには常識や科学のもつ自然的態度が措定している二元論的実体化を還元（エポケー）するという、現象学的分析の手続きが取られねばならなかった。「わかる」ということが「わかる」「区分する」「分節する」という人間主体の志向的機能に基づくならば、当然、「わかる」「分節化する」以前の連続の体験が予想されねばならないし、人間の志向的機能を離れて、世界とそこにある存在自体に区分はないことが明らかにされねばならない。

市川浩が、身＝トータルな人間存在の構造を論じた際、「身による世界の分節と世界による身の分節」を、身と世界の間の同時的共起的な弁証法的相互規定の関係と見なし、それを「身分け」⁴⁾としてとらえたことは、筆者の主張と一致している。しかし、市川の「身分け」の論理でポジティブに明らかにされていないのは、「身による世界の分節と世界による身の分節」の弁証法を支えている、「身分け」や「分節」の基盤となっている「連続の体験」についての考察である。したがって、「わかる」ということをより深く「わかる」ためには、自らの体験すなわち自己と世界の関わりを「わかる」「分節する」志向的機能の前提に「わかれぬ」「わけられぬ」連続の体験があることを明示する必要があったのである。

この領域での連続と分節の体験は前二稿で詳細に分析したことであるが要約すると以下のよう⁵⁾に整理できる。

I－C、時間体験に関しては、反省された時間、現象的述語的体験、空間化された時間（分節）に対する、生きられた時間、前現象的前述語的体験、純粹持続の体験が連続の体験として位置づけられる。

I－D、空間体験に関しては、それを知覚、身体、自然に区分して、知覚体験においては図地分節（分節）に対する図地未分化を連続の体験として、身体体験においては客体としての身体（分節）に対する主体としての身体を連続の体験として、自然体験においては自己の身体を中心にして生活世界的に意味づけられ分節化された生活空間の体験（分節）に対する自己と自然の一体連続の体験を連続の体験として位置づけた。

I－F、自己体験と他者体験に関しては、自他の分化、母子分離、われ－それ関係、自己と集团的われわれの分離（分節）に対する自他未分化、母子一体、われ－なんじ関係、集团的われわれへの自己同一化が連続の体験として位置づけられた。

Strasser が、客観的なものの成立に関して、区分、同定、命名という三つの基本的な志向的機能によって説明したことは、「わかる」という現象の主観性と相互主観性（客観性）、個人的体験やその自覚化言語化と言語そのものがもつ社会性、相互主観性にまたがる問題としてであった。筆者の観点からこの問題を整理すると以下のように言うことができる。

「わかる」ということのも層性について（Ⅲ）

関係存在としての人間の諸現象を学問的反省のもとに取り扱う時には、明晰な言語でそれを論述しなければならない。しかし言語による現象の記述は弁証法的な関連にある現象のすべてを一度に言い表わすことはできず、線型的、前後関係的、時間的な秩序をなしている言語の構文規則に従って、一步一步、Polythetic に、最初の単語から論述を終える最後のセンテンスの終止点まで順を追ってしか論述できない。

例えば、個人と社会という相互規定的弁証法的な関係を論述する場合、個人から出発すると以下になるだろう。

複数の個人が集合して生活を共にする中で相互行為を行うと、相互行為がくりかえされる中で生活のあらゆる側面で一定の相互行為の型ができあがる。型ができあがるとそれらの型が相互行為を規制するようになると共に、相互の了解可能性や予測可能性が増し、やがてそれらの型は規範や規則として人々の間に定着される。それらの型や規範はさらに集合的生活が継続される中で相互に組み合され整合されて、相互行為の型のネットワークとしての社会的制度が形成される。

このような個人から出発する論述に従えば、社会的制度は個人が集合して作り出すものとして描かれるのであり、「個人は社会を作る」という命題に集約される。

一方、既に成立している社会から出発して社会がその構成員である個人をどのように形成していくかということを論述すれば、通常の社会化論に見られるように、既に成立っていて個人の外部にある社会的な相互行為の型や規範や価値体系を個人が内側に取り入れ内在化することによって社会的な自我を形成するというふうな説明となる。これを要約すると「社会は個人を作る」という命題となる。

これら二つの命題は形式論理的判断形式では、同時に成立不可能な矛盾しあう命題であり、どちらか一方が真であるか、両方とも偽であるかしかなく、両方が成立つことはありえないとするのが論理的である。しかしそのような判断はそもそも個人と社会という概念をともに実体化してとらえているからそのようなことになるのであって、両者はそれぞれ関係存在なのであり、一方なしには他方が成立しないような相互規定的弁証法的な関係の中でのみそれと名づけられるような存在であることに盲目だからである。

したがって、それ自体として実体的に成立するような個人も社会もなく、個人の中には内在化された社会の価値体系や規範や行為型が機能していると共に、社会の中には主観的な思われた意味に従ってなされる諸個人の主体的行為が機能しているという相互規定関係の中でのみ個人と社会と名づけられる現象が同時的共起的に成立しているのである。そしてこのような関係は「個人は社会によって形成されつつ社会を形成する」と言われねばならない。

同様のことは「身は世界を分節すると共に世界によって分節される」「身は文化によって形成されつつ文化を形成する」「精神は身体をコントロールすると同時に身体に支配される」「個

人の発活行為（parole）は社会的に共有されている言語体系（langue）の規則に従うと共に言語体系を不断に作りあげ変化させる」「言語による分節は体験による分節を枠づけると同時に、体験による分節によって新たな言語的分節が⁷⁾つくり出される」といった、弁証法的関係にある多くの事柄について言うのである。

以上のことをふまえた上で「わかる」ということを体験に即して論ずると、意識化や自覚化や言語化以前で「わかる」「わかる」次元と意識化、自覚化、言語化以後で「わかる」「わかる」次元の区分と相互の関連、相互規定の関係が問題となる。この問題に関しては、市川浩が錯綜体としての身の統合について論ずる際に区分した、向性的統合、志向的統合、仲だちされた統合とそれらの相互規定的関連についての考察が参照されるべきである。

（１） 向性的統合

向性的統合とは、反射のような非意識レベルのはたらき、また意識化しうるのが当面は意識の焦的にのぼっていない前意識的な分節化のはたらき、あるいはさまざまに変形された形で意識レベルに影響を与える無意識的なもののはたらきなどの意識されないレベルでの統合である。⁸⁾

これは主として身体が自動的無意識的に生活環境に適応する中で行っているすべての分節を含んでいる。生理的次元では環境の変化に対応する自己調節機能であるホメオスタシスの機能が向性的統合をになっている。また反射のような学習によらない生得的な分節もある。例えば瞳孔反射は外からの光刺激の大小に対して自動的に瞳孔の大小が調節される現象であるが、人体は意識以前に光量を認知し分節し瞳孔の大小を調整しているのである。

それ以外にも、意識化可能ではあるが通常意識化されない向性的身体機能に、呼吸作用を始めとして、立つ、坐る、寝る、歩く等の姿勢をそれぞれの活動に応じて維持するはたらきがある。呼吸を例にとると、呼吸は意識してもできるが、生活の大部分の活動においては、意識や注意はその時々志向対象に向うので、通常は自分が呼吸をしていることすら意識化されないことが多い。疲労や眠さによってアクビをしたり、極度の緊張によって息がつかまったり、急激な運動負荷によってハアハアと息が激しくなったりした時にのみ呼吸は意識化される。一方、坐禅における数息観のように、呼吸を意識化して調えることによって精神と身体全体を宗教的リアリティに向って調えようとすることもある。呼吸の問題は「氣」という中国や日本の概念と不可分につながっており、意識と前意識、精神と身体、自己と他者の両方にまたがって働き、スポーツや武道、音楽や演劇、日本の伝統的な芸道のすべてと密接な関連をもっているの、それ自体として別個の論述で取りあげるに価するテーマである。

姿勢を保つ身体活動もすべて意識化可能であるが通常は意識されないで自動的に行われるこ

「わかる」ということの多層性について（Ⅲ）

とが多い。例えば〇〇しながら〇〇するという、ながら行動は、〇〇しながらの部分は自動化半意識化して地の活動となって、〇〇するという、より意識化集中化を必要とする図としての行動を支えている。¹⁰⁾

向性的統合は、それより上位にある志向的統合や仲だちされた統合がより意識的、弁別的分節を行いうるための地、土台として考えることができる。意識的な行動や言語を仲だちとした高度な思考が可能になるためには、向性的統合が基盤にあって環境への適応に必要な意識下のレベルでの自動的な、従ってエネルギー消費の少い調整作用が前提されなければならない。もし向性的統合が意識下で自動的に行っていることのすべてを意識的にコントロールしなければならないとしたら、意識は疲れ切ってしまい、意識的な複雑な行動や思考にふり向けられるエネルギーはほとんどなくなってしまうであろう。

フロイト的な無意識の働きに関しては、コンプレックスが自覚化されない限り、それは不可解で不合理な罪悪感や不安や怒りや情動として、意識に逆らって特定の行動を強いたり、特定の症状を引き起すものとなる。神経症の症状をもっている人は、自らの無意識的コンプレックスが分節しているもの（彼の生活史の中の原型的な母子関係や父子関係など）と理性的常識的自我が自覚的に分節しているもの（父親は尊敬しなければならないなど）とのギャップに悩まされることになる。この場合意識下のコンプレックスは抑圧されていて意識化されていないことが決定的である。意識化されないものは存在しないのではなく、意識化されているものの基盤となっている、ということに気づかせてくれるという意味で、フロイト的な無意識の理論は教訓的である、と共に、分析者の助力によって無意識下にあったコンプレックスを自覚化できた時、神経症の症状から自由になることができる。

以上の考察から明らかであるように、向性的統合は、それ自体として他の統合から切り離されて成立っているのではなく、志向的統合や仲だちされた統合と相互に弁証法的に規定しあって全体としての人間存在＝身の統合の、概念的に区別しうる一契機なのであり、具体的な生活連関の中では、それらの統合は同時的共起的に機能しているのである。

（2）志向的統合¹¹⁾

志向的統合は意識レベルの統合である。市川はそれをさらに、自己作用的志向としての気分、情動、感情と外部作用的志向としての知覚と行動に区別している。

自己作用的志向である気分、情動、感情は自己の意識状態と身体の状態、自己と世界との関係が、知覚や行動よりも判然と分節されにくい場合が多いし、対象との関わりによって規定されることが多いといえる。

感情は快・不快、美醜、好悪などの主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけと定義され、情動は感情のうち、怒り、恐れ、喜び、悲しみのように突然引き起こされた一時的で急

激なものを指し、気分は、ある期間持続する感情状態と定義される¹²⁾。

感情が主体の状況や対象に対する態度や価値づけである限り、それは知覚に対して意識以前のレベルで影響を及ぼす。いわば好悪や快・不快などの感情に色づけられた知覚となる。

Parsons がパターン変数の一つに、感情性と感情中立性をあげているのにも見られるように、客観的な自己把握や対象把握や合理的思考を行なうためには、感情にかられないクールな感情中立性の態度が維持されなければならない。

情動は外部志向的な知覚をとともうので何ほどかの対象志向性を帯びている。我々は何かある対象が怖い、うれしい、悲しいのである。しかし強い情動には生理的動転がともない、カッとなって我を忘れたり、見さかいがつかなくなるので、対象に対する客観的弁別性を失う点では感情より度合いが高い。その意味では情動は、自己自身を急激で強力な感情の動転によって変容させることによって、世界の意味を魔術的に変える働きであるといえる¹³⁾。喜びにあふれている時は世界が輝いて見えるし、強い悲しみにうちひしがれているとき世界はくすんだものとなる。

気分はある期間持続する感情状態であるがその志向的对象はあいまいで例えば、憂鬱やうっとおしさの気分の場合、何がその気分の志向対象なのかははっきりしないことが多い。うっとおしいのは自己の一般的状態であるのか、ジトジトと雨が降る暗い外界の一般的相貌であるのか、どちらとも定め難い、両者が未分化な両義的・前客観的な自己と世界の関わりが生きられているといえる¹⁴⁾。

このように感情や情動や気分は生理的条件や向性的統合の影響を受けると共に外部志向的な知覚や意識行動に大きな影響を与える。

感情や情動や気分の分節は、快・不快、好悪、美醜、喜怒、哀楽、愛憎、恐れ、安心と不安、希望と失望、快活と憂鬱、嫉妬、軽べつ、怨恨、誇り、尊敬などのことばで行われるが、その種類と程度の分節と感知しうる身体的状態感 (spürbares leibliches Befinden) や雰囲気との関連の現象学的な探求は、人間の生きられた体験の構造を解明する上で重要な視点となる¹⁵⁾。

社会学の立場からしても、ヨーロッパ中世や日本の中世の人々の精神生活と社会生活を規定した要因としての死後に天国や極楽や浄土に行けるかどうかに対する不安の感情や、ナチスを生み出した1930年代のドイツ中産階級の不安の感情や、戦前戦中のファシズムの社会を生きた日本人の閉塞した感情生活や戦後の急激な感情的圧力の解放等、社会や時代の支配的な感情生活のあり方と社会構造の関係の研究は、社会認識に新しい視野を開くことになると思われる¹⁶⁾。

自己作用的志向としての自分の感情、情動気分が「わかる」という場合、それは外部作用的な知覚や行動に比して、自らの体験を明確に分節化することは困難であり、言語的分節と他者の感情表現を手がかりとする必要が大きい。感情にとらわれているとき、自分が今どんな感情でいるのかを自覚することはしばしば困難であり、対面的な他者に指摘されないと気づかない¹⁷⁾。

ことすらある。また言表わし難い感情を適切に言語化できたときに、自分の感情がはじめて納得される。

生活のあらゆる側面で合理化が進行している近代的な社会は、感情中立性を基本的態度としており、感情の生々しい表出が抑圧される傾向がある。もちろん性や年齢や職業や階層や地域や状況の差異によって感情表出に対する許容度は異なるし、同じ近代化した社会であっても文化的差異が当然あるが、近代社会においては、社会生活の多くの分野で冷静な感情中立的な態度の保持への圧力が高まっていきつつあるように思われる。その結果として一種の感情鈍磨の状態に陥っていることに近代人の多くは気づかない。特に組織の中で型にはまった感情中立的態度での役割遂行を強いられる組織人にこの傾向が強く見られる。

センシティブティトレーニング (S.T.)¹⁸⁾ では、「いま、ここ」での自己の感情や気分や身体的状態感や雰囲気¹⁸⁾に気づくことと、対面的に出合っている他者のそれらに気づくこと、自らがそれを素直に表出することと、他者の表出を受容した上で、より感受性豊かな開かれた人間らしい関係を作り出すことを目的として、8—12名の未知の参加者と2—3名のトレーナーからなるTグループで1回60分程度のセッションを15回ぐらい、約一週間にわたって続けるという形で行われる。もちろんそれはトレーニングであるので、日常的な社会関係における時間や空間の枠組や社会的地位や肩書はエポケーされ、実験室的な場が設定されている。

そこで引き起こされるメンバー間の出会いは実に多様であり、個人差も多いが、そこで気づかれるポイントは、日常的な職場や家庭や地域の社会生活の中で、我々は如何に不自然に相互の感情の感受や表出を抑圧しているか、抑圧されているかということである。そして実験室的状況であれ、宇余曲折をへてやがて自他の感情の素直な感受と表出が達成されると、非常な全身的カタルシスと解放を感じると共に、自由な感情表出がお互いにできる人間的な主体同志であるという、相互評価と相互確認が行われ、利害関係や社会的地位の差異を越えた、ベーシックな人間的共感にもとづく信頼関係が形成されるのである。

私自身が経験した S.T. の状況を理念化して要約すると上記のようなことであるが、知識社会学的観点から重要な点は、日常的な社会生活の中で如何に気づかれないうまに感情の自己感受能力を鈍磨させられているか、感情の自由で自然な相互表出と相互感受を阻害されているかということである。と共に、他の時代や社会と比して、近代社会のあらゆる分野での合理化の進行は、そこに生きる人々の感情鈍磨の傾向を強めているのではないか、冷静で感情中立的な合理的計算可能性と操作可能性が追求される中で、生き生きとした人間的、生命的感情と感覚とそれにもとづいた認識や行為が閉塞させられつつあるのではないかということが問題となる。

感情や情動や気分は身体的向性的統合によって影響を反け、知覚や判断や行動のクールな客観的弁別性を損なう傾向があるが故に近代社会では感情中立性が要求されるのであるが、それ

が生み出している感情鈍磨や感情喪失の傾向は精神分裂病の症候である以上、真に人間的な全体的な合理性とは何かを考え直す時期に来ていると思われる。

外部作用的志向としての知覚に関しては前稿¹⁹⁾で知覚の諸様態について個別的に、図地未分化（連続）と図地分節（分節）の経験として考察した上で、共通感覚と常識について言及しておいたのでここでは省略する。

意識化して行われる行動の分節に関しては、Schutz の行為論²⁰⁾が参照すべきである。

Schutz は行為（action）を、「行為者によって前もって未来完了形で考えられた企画（project）にもとづいてなされ、身体でもって外界に歯車をかませ、それを変えていく継続する過程としての人間の行動（conduct）である」と定義している。したがって行為は定義上、行為者の意識的企画を前提にしている。そして意識的企画を行為者が行為に先立って持つということは当然、正常な成人ならば、言語による仲立ちによって、行為の目標と行為の出発点から到達点に至る行為経過の polythetic な諸段階とそこで必要とされる手段を前もって考えるということである。

さらに行為は行為者によって思われた意味、動機にもとづいてなされるが、動機は企画される目標が行為者にとって達成すべく意味づけられている目的動機（in order to motiv）と彼の生活史のその時点でなぜそういう企画を持つに至ったかという理由動機（because motiv）に区分される。目的動機は行為者の未来に、理由動機は彼の生活史的過去に関係している。

また行為は未来完了形で行為結果があらかじめ企画され予想されるものである以上、初めての行為であっても、以前になされた同様の行為の類型についての知識にもとづいて予想をたてる形をとって行われることになる。

日常的な、自然的態度で生きている行為者が参照する知識の体系は常識とよばれるものである。常識的知識のストックは行為者が属する社会や文化のメンバーに共有されている、相互主観的な類型の体系とレリバンスの体系²¹⁾から成立っている。

この常識的知識のストックには、知識の社会的起源についての知識とその社会的分布についての知識も含まれている。行為者が持つ知識は彼の発明物ではなく、彼の属する社会の先人や父祖たちが生み出し受けつぎ、時間の中で試され、その有効性が確認されている知識である。またそれは、あらゆることを細部にわたって知っているという百科全書の知識ではなく、より高度な知識は専門家の間で社会的に分布されており、必要な時に適切な専門家の知識を利用すれば問題を解決できるというプラグマチックな性格をもった、知識の社会的分布についての知識である。

類型の体系は世界の中のあらゆる事物や出来事や行為を分節し命名しており、日常的に人々

のコミュニケーションの媒体となる言語体系に反影されている。また、共有された世界の言語的分節は日常生活を生きる行為者にとっては、自明で相互主観的な類型の体系をなしている。レリバンスの体系は、行為者が行為の企図を主題として設定する場合に、主題として妥当か有意義か適切かを定める枠組となる主題的レリバンスと、いかなる動機にもとづいて行為するか枠組となる動機的レリバンスと、これから行われる行為の企図や、すでに終了した行為結果について、自分自身や他者に説明したり解釈したりする枠組となる解釈的レリバンスに区分される。

このようにして、日常的な行為者は、常識化され共有され自明化された類型とレリバンスの体系にもとづいて、類型的な状況のもとで、類型的な目的動機や理由動機にもとづいて、類型的な企図をたて、類型的な手段を用い、類型的な行為経過をたどって類型的な行為結果に至ることになる。これらは日常的なルーティンの行為の自明性（問題とならないこと）を支えており、新しい行為を企図し実行する場合にもそれが常に参照されると共に、新しい行為でもたらされた経験は類型の体系の中のバリエーションとして知識のストックに組み入れられる。

しかし、自ら課題として選びとるにしろ、状況によって外から課されるにしろ、手持ちの知識のストックでは処理できないような、全面的に新しい問題となる事態に出合うことがある。そのような場合にはまず、問題を問題として主題化することから出発して、問題解決に必要な新しい知識を自ら獲得する（試行錯誤によってか学習によって）か、専門家の知識にたよるか、いずれにしてもプラグマチックな範囲で問題解決に必要な知識が獲得され、問題解決に必要な行為が企図され、その主題的、動機的、解釈的レリバンスが検討され、問題解決の行為がなされるに至る。

問題が解決され、それがくりかえされると、問題的だったもののルーティン化、自明化、類型化が起り、私はそれをもう一度できる（I can do it again）と、以下同様（and so forth）の理念化がほどこされ、手持ちの知識のストックに加えられることになる。

以上 Schutz の行為論と日常生活世界の知識論を検討してきたが、本稿との関連で言えば、意識的になされる行為はたえず類型の体系が参照されつつなされ、新しい行為も最終的には類型化に至るということ、そして Schutz の言う類型の体系とは、まさに分節の体系であり、類型の体系は相互主観的な日常言語の体系における分節に密接に関連しているとされる点が重要である。

生きられた体験の時間的流れ（純粹持続）の連続の中で、自分の一つの行為を他の行為から区分し分節し命名することは、すでに行為し終えた過去の行為を後至的な反省によって意味づける場合にしろ、未来になすべき行為を前もって未完了形的な企図として思い描く場合にしろ、行為者の主観の中で意識的に行われるのであって、自らの行為を「わかる」とは、そのような分節を自らの体験の連続する流れに課すということである。したがって厳密に言うと、一

つの行為がいつどこで始まり、どこで終るかということは、行為者の主観的意味づけによってのみ分節される。しかし類型化された知識は、それを共有しているメンバー間の理解可能性を保証すると共に、相互の行為に対する予測可能性を基礎づけるから、人々は行為類型の言語的分節によって自他の行為を共通のことばで分節し、伝達し「わかりあう」ことができるのである。

Schutz は意識の働きや意味の規定、行為の時間的構造の分析を Husserl の『内的時間意識の現象学』で展開された諸概念を援用して行なっているが、時間体験の分析を意識レベル²²⁾（志向的統合）に限定していて、向性的統合や仲だちされた統合との関わりに考慮を払っていない。Husserl の時間論をうけついで Schutz の意味の規定と行為の規定が、意識内在の限界を持つことは別稿で指摘した通りである。²³⁾

行為は、生身の身体でもって外界に歯車をかませ、外界を変えるものであるから、そこに無意識レベルあるいは前意識レベルの向性的統合が参与しており、また、あらかじめ思い描かれた企図に従って類型の体系を参照しつつなされるのであるから、そこに仲だちされた統合（言語）が機能しているのであり、錯綜体としての身の統合によってなされる行為は、向性的統合、志向的統合、仲だちされた統合の全てが参与し、それぞれの現実的統合のみならず、潜在的統合によっても規定されながらそれらの弁証法的相互規定関係の中でなされているものと見なすべきである。

（３） 仲だちされた統合²⁴⁾

仲だちされた統合は、道具と機械を含めた意味での用具と、言語その他の記号、また個人の集合によって形成されながら個人にとっては外在的に存在している制度などによって媒介された身の統合である。

用具による仲だちについては前稿で比較的詳しく述べたし、言語による仲だちについては、本稿ですでに述べた。制度による仲だちは、まさに社会学の中心的主題であって、個人と社会、制度化と社会化の弁証法として定式化される問題であり、別に一個の論述を必要とする拡がりをもっているので、別稿で詳論することにした。

Ⅱ「わかる」とは、自らの体験の中で分節したことがら（身分け）を、ことばで表現できること、「言分け」することである。「わからない」とは「身分け」したことを「言分け」できないということである。

前節Ⅰで、「わかる」ということを連続の体験に分節を課すことによって「わかる」ことであるという基本的主張を、市川の錯綜体としての身の統合の三つのレベルを検討することによって展開してきた。向性的統合は意識以前の身体的なレベル、志向的統合は感情や知覚や

行動の意識化されたレベル、仲だちされた統合は身の延長拡大あるいは超越の機能を果す用具や言語・記号や制度のレベルとして位置づけられた。そしてこれらの三つのレベルの統合は相対的に区分して論じうる階層構造をなしているが、現実生きて働く身としては相互に弁証法的に規定しあって同時的共起的に機能していること、さらにそれぞれのレベルにおける分節（わかる）のあり方を考察した。

錯綜体としての身の経験可能性、分節可能性のすべてが言語化するものではないし、意識以前、言語化以前の体験のレベルにおいても、人間の身は世界を分節しつつ世界によって分節されているということを確認した上で、次に、身による世界の分節と言語的分節との関わりを考察する。というのも、通常我々が「わかる」と言っていることがらは、自らの体験の生きられた分節を意識化し言語化し、さらにそれを他者に説明できることを予想しているからである。

市川は「身による分節」を「身分け」とよび、ことばによる分節を丸山圭三郎の用語を引いて「言分け」²⁶⁾とよんでいる。「身分け」したものはすべて「言分け」されるわけではないが、我々の体験においては、身が感じとった分節をことばで表現できたときに、より安定して「わかった」と感じられる。逆に、何か気になる、感じとってはいるのだがことばで表現できない、適切なことばが見つけれられないような場合には、もどかしく落着かない感じを持つ。

それは、ことばが本来的に相互主観性と関わっているからである。個人の主観的体験の中で区分（分節）され同定されたことがらが命名される（ことばで表現される）と、主観的な体験におけるその私的な分節は、われわれ一共同体の「公開」²⁷⁾（Offenheit）の中へ引きあげられるのであり、無言のもとにあった主観的な体験が、相互主観的な公共性、共有性、伝達可能性の次元を獲得するからである。子供が言語以前に体験し分節した物やことがらの名前を「これはなに」と大人にたずね、「これは菜の花だ」と教えられる時、子供の中に起っていることは、そのものを、いつでも、だれでも「菜の花」とよぶ大人の公共的な世界、一つの言語共同体に参与していくということである。

犯罪者が罪を「自白」するというのは秘密の、自分一人しか知らない行為を、刑罰を受けるという負担を覚悟の上で「公開」することである。罪の自白とその同定、確認と課刑という一連の手続きは、社会の側から見れば逸脱者に対する統制の一つの形式であるが同時に、犯罪者の主観から見れば、罪を犯し、それを隠すことによって公共の世界、相互主観的認知の世界から無言で脱落してそれに苦しんでいた自分が、それをことばで語る（自白する）ことによって公共の世界に復帰するという意味をもつ。

人々が日常とり交わす「あいさつ」や「世間話」には自らの実存がかかるような実質的な内容は何もない。しかし人々は大して意味のないことばを交わしあうこと、会話しあうことによって、リアリティを共有し²⁸⁾あっていることの確認をしているのであり、自分が相互主観的な公

共的われわれの世界から脱落²⁹⁾していないという安心感を獲得しているのである。

S. T. のグループ状況の中で終始無言でいる人物がいて、他のメンバーはそれが気になり、不安になり始める。会話を交わし合っている他のメンバーがことばを交わすことによって作り出している共通の場に彼が入っていない、あるいは入るのを拒否していると感じるからである。またある時には、セッションが始まって誰も発言せず沈黙が10分も20分も続くことがある。

沈黙にもいろいろな場合があって、グループの中でお互いが相手をうかがいあって出方を見る場合の沈黙や、一つのやりとりが終って次の話題に移るまでの間としての沈黙や、相手の鋭い問いに答えるために自分の気持を確めたり、それを伝える適切なことばを遅らしたりする時の意味が充実した沈黙や、みんな疲れていてグループのエネルギーが低下している時のだらけた沈黙や、新たなやりとりのためのエネルギーをためるための沈黙などさまざまである。しかし一般的には、Tグループの対面状況で、全体として無意味な沈黙が続くとメンバーは気まずく重苦しく不安になってくる。これは逆に考えると、人が出合えば絶えずことばを交わし日常的なレベルでの相互主観的なリアリティを確認しあうということが自明の規範となっていることを示している。と共に、単にリアリティの共有の確認のための次元でなされる会話は、会話者の実存にふれてくる真の対話とはなり得ない。あるいは深い実存的な出会いを避けるために、人々はあたりさわりのない世間話を続けているのだとも言えよう³⁰⁾。

言語化することの相互主観性との関わりは表面的な日常生活の次元もあれば、深い実存的な相互理解の次元もあるが、一般的に言えば、言語自体が相互主観性を内在している。したがって自分以外の読者を予定していないプライベートな日記のような場合でも、自分の体験が分節したことをことばで表現すること、あるいはことばで考えること、それ自体がすでに相互主観性を前提にしているわけである。

一つの言語を母語として持つということは、その言語を共有している一つの社会が世界を言語的に分節している分節体系を自分の中に内在化しているということであり、相互主観性を内在化しているということである。したがって、極端な独我論者が主観的には、世界は自分の主観に解消される、という彼の思考を理路整然と完璧に説明できたと信じたとしても、それをことばで考え書いたこと自体が彼の独我論を裏切っており、彼がことばを用いてしか思考したり論じたりできないということがら自体が彼が内在化している相互主観性を露呈しているのである³¹⁾。

以上のことから、個人が自らの体験に分節を課し「身分け」することが「わかる」ということの第一の次元であるとすると、「身分け」した自らの体験を「言分け」する、ことばと結びつけることによって、ことば自体に内在している相互主観性の次元を獲得する、定着させることが「わかる」ということの第二の次元であると言える。このレベルでの「わからぬ」ということは、自らの分節したり感じとっている体験をことばに結びつけることができない、言い

「わかる」ということの多層性について（Ⅲ）

表わせないということを意味する。

子供がワッと泣き出す時、大人は「どうしたの、わけを言ってごらん」とよく言うが、子供が泣き出したのは彼がことばで表現できない情動を体験しているからであって、ことばで表現できれば彼は泣かないですむのである。ことばで表現できない体験はその時点では身分けはしていても言分けの次元では「わからない」体験であり、極度に強い感動や情動は非言語的な表現によってしか表現できないのであり、言語化できた時にはもはやその感動や情動そのものの中にはいない。

また体験をことばに結びつけること、命名することは、その体験の相互主観的批准と固定化・自明化をもたらすから、その体験の他の側面や特性をおおいかくすという負の側面をもっている。我々は母語のもつ分節体系を内在化してしまうと、それが世界を経験する枠組となって固定化し、その枠組に従ってしか世界を経験できないという疎外を同時に引き受けている。

ことばによる世界の分節は相対的なものであることは、異なる言語体系と母語を比較してみると直ちに自覚される。それはさまざまな言語による世界の多様な分節体系を支えている、言語以前に生きられている生活世界的体験の層の分析の必然性を開示する。いわば自らが内在化している母語の枠組から自由になるだけでなく、諸言語の枠組からも自由になりうるような前述語的に生きられている体験への還帰が必要とされるのである。

Ⅲ「わかる」とは、ことばをことばで置きかえること、未知のことばや記号を既知のことばや記号に翻訳できることである。この次元での「わからない」とは、未知のことばや記号に出合って、それを既知のことばや記号と結びつけられないことである。

これは通常学校教育の中で「学習」として課されている最大のものである。子供たちは次々と未知のむつかしいことばや記号を学習させられる。先生は子供たちにとって未知のことばや記号を説明してくれる。それは未知のことばや記号を子供のもっている既知のことばや記号と結びつける作業である。

「 H_2O 」は水素原子が2個と酸素原子が1個結合してできている水の分子式である。とか、「尊敬」とは他の人間をうやまい、とうとぶことである。とか、「1192年」は源頼朝が鎌倉に幕府を開いた年だ。とかである。こうして未知のことばや記号を説明する正解が提示され子供はそれを暗記することを強いられる。

受験教育の訓練の大部分は、正解のわかっている問題について、いかに早く大量に正確に答を出すかということに費される。そしてその大部分は、問と答の既存の対を、あるいは問から答に至る既存のプロセスを理解し、暗記することとスピードアップすることに向けられている。

しかし、未知のことばや記号を既知のことばや記号に結びつける作業は、既知のことばや記号が直接自分の生きた体験と結びついているものとして、体験に根を下していなければならない

い。

辞書は、ことばによることばの意味の説明を与えるものである。国語辞典を引くと、「砂」は、「非常に粒の細かい石。いさご。」「石」は、「土より固く、水に沈み、砂より大きく、岩より小さいかたまり。」「岩」は、「大きな石、岩石。」と定義されている。これは、ことばによることばの説明、定義が循環することを見るのに最も簡単な例である。

この例では、定義されることばも、定義するのに用いられることばも、我々の日常生活の中で直接体験し分節しているからこのような循環的定義でも「わかる」ような気がしている。しかしこの例で明らかなことは、ことばでことばを置きかえるという作業は結局「定義の循環」即ち循環した同語反復に陥ることである。そして定義の循環を打ち破ってそれを有意味にするのは、最終的には生きられた体験とことばとが結びつけられている、「身分け」と「言分け」と「体験」を結びつける環であり、それこそが最も基本的な、ことばで「わかる」ことを可能にする環であるということである。

IV「わかる」とは、体験とことばを結びつけ、さらに未知のことばを既知のことばに結びつけ翻訳説明できるだけでなく、そのことばを生活のさまざまな文脈の中で使いこなすことができることである。「わからない」とはことばでことばを説明できても、それを生活の中で使いこなせないことである。

このレベルでの「わかる」は「知る」ということばの意味が³²⁾「領る」、支配する、統治する、マスターする、であることと結びついている。これは単に暗記してことばや頭のレベルのみで認識として「わかる」「知る」のではなく、現実生活の実践的狀況の中で必要を充たしたり、問題解決をする上で使えるようなわかり方で「わかる」ということである。

ことばやことばで表明された思想が「身についてわかる」ということは、「わかる」ということの身体化され生活化された次元であって、認識と実践の結合とよばれていることがらである。

外で自分を「自由主義者」であるとか「民主主義者」であるとか「宗教的人間」であるとか自己定義をし、理路整然とそれを論じたり説明できたとしても、家庭に帰ると暴君で権威主義者で功利主義者であるというようなことは日常的に多く見られることである。このような人物は、頭では、観念では「自由主義」や「民主主義」や「宗教的人間」が「わかっている」つもりであるが、身についた思想としては全然「わかっていない」ということになる。

外国語の学習における「わかる」ということは結局この「身についてわかる」レベルにまで到達しないと役に立たない。そして外国語を身につけるということは同時に、母語とは異なった分節体系を身につけ内在化するということを意味し、母語のもつ分節体系を相対化しうる手がかりを持つことになる。

V「わかる」とは、そのものやことのプロセスがわかることである。このレベルで「わからない」とはプロセスがわからないことである。

あるものやことを「ここ、いま」の現われとして単定立的（monothetic³³⁾）に分節し区分してそれを言語化できるだけではなく、そのものやことが「ここいま」の現われに至るまでの複定立的多段階的（polythetic）なプロセスを含めて「わかる」ということである。

これはⅣでのべた、「生活の中のさまざまな文脈の中で使いこなすことができる身についてたわかり方」を達成することと不可分に結びついている。

例えば、一つの花を見て、これはチューリップの花だと「わかる」（言分けする）のみでなく、その花の球根から発芽し成長して、つぼみができ開花し、やがて花や葉が枯れ地下に球根が残って冬を越すというプロセスを含めて「わかる」というわかり方の次元である。このようなプロセスがわかっているとき初めて、その花をよりよく取り扱うことができる。

また、スーパーマーケットの棚にパックされて並べられている鶏肉を、それはにわ鳥の肉であって値段はいくらであるということが「わかる」だけではなく、飼われている生きた鶏が殺され皮をむかれ、解体され、モモと手羽とササ身と内臓等に分けられ、パックされ値札が貼られ、運搬され店頭に並べられているというプロセスを含めて「わかる」わかり方である。

これは人間の理解に関しても言えることであって、一人の人間の「ここいま」での表現や行為を見て、なぜ彼がそのような表現をしたのかを、彼という人格の形成プロセスを含めて「わかる」ことである。

近代社会は、ものやことのプロセスが短縮されたり、省略されたり、日常生活の目に見える場面から隠されていく傾向を強めている。

その最も顕著な事例は人間を含めて生き物の生と死のプロセスに見られる。近代社会では誕生も死も設備と専門家がそろえられた病院の中で病院の管理のもとでなされる³⁴⁾。近代以前の社会では人間は自分の家で顔見知りの産婆さんの手助によって生まれ、自分の家で家族や縁者に介護され看とられつつ死んでいったのである。また伝統的農村社会では身近な所に家畜がおり、動物たちの誕生や死に立ちあったり、その解体に立ちあったりする機会が多かった。

物ができあがるプロセスも日常的に目に見える所で行われることが多かった。子供の頃町の小さな鉄工所の店先にすわり込んで、職人さんが、真赤に焼けた鉄をハンマーでたたいて整形していたり、施盤で鉄クズを出しながらネジ切りをしていたりするのを見ていた。大工さんが積みあげた材木を何日もかかって切ったり、削ったり、ホゾ穴を掘ったりしたのち、棟上げの日には一日で家の骨組を組みあげてしまうといったプロセスを、学校への往復の道や遊び場へ行く道端で風景として見ていた。またじっと自分の仕事をのぞき込んでいる子供に職人さんが話しかけて、そこに話のやりとりが起ったりした。

このようなプロセスのほとんどが近代化、都市化が進むにつれて日常的な視界から消え、現代の子供たちは、単定立的に提示された結果だけを与えられて、それが何であるかを、そのプロセスについての理解なしに「わかる」「利用する」という状態に置かれている。

また、プロセスの理解ということは、仲だちされた道具や機械やが無い状態からある状態への変化についての理解に関しても重要である。ある便利な用具が「ある」ことの意味を本当にわかるためには、それが「ない」という状態を知っていないといけない。それが「ある」ということが自明であって「ない」という状態を知らないと、それが「ある」ということによって疎外される危険をとまう。

生活様式が近代化され、都市化されるということは、生活に必要なほとんどの事がらが専門家や専門組織によって代行され、制度化され、機械化され自動調整化されるという傾向が進行していく過程である。³⁵⁾ いわば生活の全体の中で、仲だちされた構造が増大し続け、体験の直接性がいくえにも重なった間接性にとって代われ、目に見える形でのプロセスが短縮されたり消去されて、結果だけが提示され享受されるという、直接体験とプロセス体験の減少が進行していくことであるといえる。

自分でやってみよう (Do it yourself) の運動や、手造り志向の流行、健康食品や器具の製造販売の巨大産業化、ヨガ教室やスイミングスクール、ゴルフ産業やスキー産業、釣り具産業やそれらに関連する旅客産業等の健康・スポーツ産業の成長の中心には、自前の直接的な身体体験とプロセス体験を喪失した近代社会の住人たちの欠如感があり、それらの産業の隆盛はその欠如感に対してそれらを産業化し商品化した形で提供しようとする現象と見ることもできよう。

その意味で「オリジナルに自前で身体に根ざした直接体験とプロセス体験を回復すること」は、商品化や産業化の論理や、行政主導の管理の論理から自由になった、自発的な市民のボランティア的運動という形でしか達成できないのではないと思われる。

VI「わかる」とは感情を含めて、他人の言うことや行為することがわかること、他者理解ができることである。「わからない」とは他者理解ができないことである。

自己認識と他者認識は相即している。自分で自分自身が「わかる」ようになる分だけ他者を「わかる」ことができるようになり、その逆も真である。

まず、他人の言うことに関しては、言われたことば自体が発話者の主観的意図と切り離されて持つ客観的公共的な言語としての意味を担っている。したがってその論理的なことばそのものとしての意味が「わかる」ことが必要である。これはことばの持つ相互主観的客観的側面の理解であり、解釈者の言語能力の程度によって理解の程度が決まってくる。

しかし具体的な発話は、その状況に規定された話し手の主観的意図の表現行為なのであるから、その表現行為がもつ意図や動機を「わかる」必要がある。このことは日常的な状況では先

「わかる」ということのも層性について（Ⅲ）

に要約した Schutz の行為論、知識論の枠組を他者の表現行為にあてはめて理解することができる。

他人の表現行為を自分が持っている類型とレリバンスの体系とを参照しつつ、行為のなされる状況、行為者、行為の動機や企図、行為の経過と結果を分節化し、類型との偏差を考慮に入れつつ理解するのである。ここでは自分の表現の枠組は他者の表現を解釈する枠組と対をなしている。

手持ちの知識（類型とレリバンスの体系）で理解できないような場合は、問題となる状況が現出し、問題解決の行為がとられることになる。

表現行為は、しばしばダブルメッセージ（表面的意味と本音）を含むから、他者理解の際、他者の表現や行為を支えている向性的構造（姿勢や呼吸や表情、声の調子、視線の向き、しぐさなどの非言語的な表出）は、他者の表現行為の隠された動機や意図、感情や本音を表わす指標として利用される。³⁶⁾

また他者の「ここいま」での表現行為に至るまでのプロセスについての知識やさらに、彼の生活史的な成長プロセスについての知識が、より深められた他者理解の手がかりとなる。

S. T. の場面では、他者の発話や表現から、他者の「ここいま」での感情状態やその場にいる自分や他のメンバーへの構えを感じとり「わかる」ことに注意が向けられる。ここでは論理的な知識や客観的な情報の伝達のレベルは注意の対象にならない。トータルな人間としての感情や構えをお互いに感じとること表現すること、それを受容しあうことがめざされる。

生き生きとした現在で対面的に出会い、やりとりする S. T. の状況では、セッションが深まってくると、出会いのプロセスが深められてゆき、自分及び他者の感情状態や構えに気づく、それが見えてくるという経験をする。S. T. の場面における他者理解は、理念化され、エポケーをほどこされた非日常的な場でのできごとではあるが出会いのプロセスをふまえた、自己理解と他者理解の最もベーシックな原型を含んでいる。

VII「わかりあう」とは、お互いに相手の分類体系（分節体系）がわかるということである。³⁷⁾
「わかりあえない」とはその逆の場合である。

日常生活のレベルでは、我々は社会的に共有された言語的分節体系や、類型とレリバンスの体系を持っている。いわば分節体系の基本的な部分を社会文化的に共有しているわけである。そこでは、表現の枠組と解釈の枠組が共有されている範囲内で、日常生活をプラグマチックにスムーズに行いうる範囲で相互理解がなされている。社会的に標準化され、類型化され匿名化された、地位や役割、経歴などを手がかりとして、相互に相手を類型化して、類型化された役割演技の範囲で「わかりあう」ことになる。

Schutz は類型化を、関わる相手や対象の匿名性の程度と、対面的接触の実現あるいは回復

可能性の難易の程度とに関わらせて論じている³⁸⁾。

社会的な類型の匿名度は、その中で構成された関係がどの程度容易に、直接的な対面関係に変えるかによって決定される。(1)今のところ直接的対面関係にいない友人Aについては、私は彼とのこれまでの直接交渉を通じて、その経歴や個性の細部まで知っており、目前に彼がいない今、彼について考えたり理解したりする場合の類型化は、匿名度が低く、内容が充実したパーソナルな類型である。(2)私が直接知らないが、私の友人が最近直接会って私に語ってくれた相手の場合は、パーソナルな類型ではあるが、個別的内容の充実度は(1)に比してはるかに少なく匿名度が大きい。(3)私が手紙を出す場合、その手紙を取り扱う郵便配達人に関しては、私はその人物の個人的特性には関心をもたない。彼は一定の行為経過の類型によって役割機能を果たす匿名的な存在でしかない。

このように社会関係の中での他者理解や相互理解は類型化を通じてなされるが、その類型化は相互的なものとして働く。私が列車に乗るとき、私は運転手や改札係を鉄道従業員という機能的な類型として考えるが、それは彼の側での私についての相補的な類型化「乗客」と対応している。私はまた、相手を鉄道従業員として類型化することによって、私自身をも相手の類型に対応するものとして類型化する（乗客としての私）。

日常生活での対人接触においては、親子や夫婦の間でも常に何ほどかの類型化を相互に施しあって相互行為や相互理解がなされている。しかし、S.T. の状況で目ざされる次元での「わかりあう」内容は、「ここいま」、で対面するトータルな人間と人間の出合いの中で、お互いを「わかりあう」という次元である。それは、相互の類型化や匿名化的理解は可能な限りしりぞけられ、身体も精神も、言語的表現も非言語的表現も含めて、トータルな関わりの中で、お互いに自分の感情や気持を素直に表現しあい、相手のそれを受容しあうことによって、相互に一個の人間、人格どうしとして根底的に「わかりあう」試みである。

理念化して言えば、ゆきつもどりつしながらもセッションが重ねられる中で、まず既存の思想や経歴や社会的地位などに規定されて物を言ったり、相手に関わったりすることが取り払われ（エポケーされ）「ここいまの出合い」に集中することができるようになる。次に出合いの中で体や気分の状態も含めて自分の気持を感じとり分節すること、それを素直に言語、非言語レベルと共に表現すること、相手の表現が自分の体や気分にどうひびいたか、自分の表現が相手にどう届いたかを感じわけ分節し、お互いにそれをフィードバックしあうことが可能になってくる。

そのプロセスで起ることは、対人関係における、言語、非言語のどちらのレベルにも、表現と理解の両方における分節の共有が行われていくということである。素直でない、自分の劣等感や相手に対する敵意などにもとづく、こだわりや底意をもった表現と、そうでない素直な表現が感じわけられるようになり、分節できるようになる。

「わかる」ということの多層性について (Ⅲ)

相手の表現が素直でないとか、本当の気持を言っているようには感じられないとか、その表現を受け取る側の気持がわからず一方的にわかったつもりになっておしつけているだけだとか、日常的場面では感じていても言えないことが表現できるようになる。このようなフィードバックをお互にくりかえす中で、人間関係の原型的な側面が感受性のレベルで分節され、それを表現することばが共有されるようになってくる。

ここで起ることは、感受性レベルの分節とそれを表現する鍵となることばのレベルでの分節の共有である。この二つのレベルでの分節の共有が質的に深まり量的に拡大してくると、相互の了解可能性は飛躍的に高まり、心身ともに対人関係に対するこだわりがとれ、解放され開かれた自由な関わりが達成される。それは、そこに参加し、プロセスを共に体験したメンバーが、一つの新しい人間関係の場、一つの新しい感受性とことばの分節体系、一つの新しい文化と社会をつくりあげるに至ることを意味する。

異文化間の接触や相互理解の場合（個人レベルと集団、社会レベルでは異なるが）についても基本的に S. T. の場合と同じことが言えると筆者は考えているが、そのことも別稿にゆずりたい。

Ⅷ「わかる」ということがより深くわかるようになるための方法的手続としての広義の「エポケー」

これまでの「わかる」ということの諸層の分析を最後に方法論的観点から要約する。

「わかる」ということの基盤には「わかる」ということがあり、それは主体が世界との関わりの中で自らの体験と世界を分節（身分け）し、しかもその分節を言語化（言分け）することであった。しかし、坂本が言うように、それ自体としての世界にはもともと区別はない。区別や分類は認識や行動のために人間がつくった枠組なのである。人間は何の枠組もなしには生きてゆけないから、人間が生活するということは、必ず何らかの分類体系や分節体系を作りあげざるを得ないということであるが、しかしそれは、あくまで人間がつくりだした枠組であることに変わりはない。

したがってそれがどのような分類分節の体系であれ、たとえそれが普遍的であるとされる科学的分類であっても、人間がつくりあげたものである限り絶対的なものではない。科学は自らの理論の相対性とその妥当範囲の有限性の自覚に立った時にのみ科学的でありうる。³⁹⁾それゆえ、より深められた知、「わかる」ということは、自らの分節体系が絶対的でないことの自覚に立って、自らの分節体系をエポケーし、脱中心化して、異なる分節体系の存在を認め、そこから学ぶことができるということである。さらにそれは異なる分節体系の「わかる」「わかる」が、そこから出てくることを可能にしている、あらゆる分節以前の人間の体験の原初的基本的な連続性に対して開かれていることである。Husserl の超越論的現象学における「エポケー」が科

学的知識（分節体系）や常識的知識（分節体系）をカッコ入れし、判断中止して、現象学的に還元された超越論的領域を開示しようとしたのも、本稿で言う所の「生きられた体験構造における基本的な連続と分節」の次元への接近の一つの試みであったのである。

しかし、ここで用いる「エポケー」という用語は Husserl 現象学の意味でのエポケーに限定されない。筆者が立つのは S. T. の場面にも異文化理解の場合にも、多元的リアリティの体験の場合にも、宗教的覚醒に至る場合にも、それぞれ異なった「エポケー」がありうるという立場、「多元的エポケー」の立場である。⁴⁰⁾

したがって、人間があることを「わかる」というし方には、人間存在の経験可能性の全体に対応する、さまざまな層や領域があり、そこにはさまざまな「エポケー」が行われ得ること。しかも、人間の経験可能性の全体が閉鎖系ではなく新たな経験可能性に対して開かれている開いた系であるのに対応して、人間が「わかる」という現象にも限界がなく、人間がないうる「エポケー」にも絶対的最終的な審級は存在しないというのが筆者の立場である。「エポケーには底がない」のである。

注

- 1) 「わかる」ということの多層性について(Ⅰ)『追手門学院大学文学部紀要』No.18. 1984. 以下、拙稿①と表記。
- 2) 「わかる」ということの多層性について(Ⅱ)『追手門学院大学文学部紀要』No.19. 1985. 以下、拙稿②と表記。
- 3) 坂本賢三、『「分ける」こと「わかる」こと——新しい認識論と分類学——』講談社、昭和57年。
- 4) 市川浩、『＜身＞の構造——身体論を超えて——』、青土社、1984、以下、市川①と表記。p.11.
- 5) シュトラッサー、S.『人間科学の理念——現象学と経験科学との対話——』徳永、加藤訳、新曜社、1977、pp.92~95.
- 6) 蔵内数太、『社会学』、培風館、1962、pp.123~124. バーガー、P., ルックマン、T.『日常世界の構成』山口訳、新曜社、1977.
- 7) 市川①、pp.58-64.
- 8) 市川①、pp.58-59.
- 9) 市川浩、『精神としての身体』勁草書房、1975以下、市川②と表記、pp.59~65.
- 10) 矢谷慈国、「多元的リアリティをめぐる(Ⅱ)」『追手門学院文学部紀要』No.16. 1982 pp.75~78.
- 11) 市川②、pp.66~75.
- 12) 宮城音弥編、『岩波小辞典 心理学』岩波書店、1956、pp.29~30.
- 13) 市川②、p.68.
- 14) 市川②、p.66.
- 15) シュミッツ、H.「不安—雰囲気と身体的状態感——」魚住・加藤訳、『理想』No.5. 1984.
- 16) 阿部謹也、『中世を旅する人びと』平凡社、1978、『中世の窓から』朝日新聞社、1981、『中世の星の下で』、影書房、1983.
- 17) フロム、E.『自由からの逃走』、創元社、1955.
- 18) 筆者が参加し経験した「人間関係訓練」のプログラムは、立教大学キリスト教教育研究所(J.I.C.E.)による「第64回 JICE ヒューマンリーレーションズ・ラブ」1981年8月24日~29日、於神戸市、「みのたに

「わかる」ということの多層性について (Ⅲ)

グリーンスポーツホテル」と、同研究所から分離して新に組織された、聖マーガレット・キリスト教教育研究所 (SMILE) による、「第3回ファシリテーター・トレーニング」1984年8月27日～31日、於神戸市「みのたにグリーンスポーツホテル」である。

関計夫、『感受性訓練』誠信書房、1965、参照。

- 19) 拙稿①, pp. 90～98.
- 20) Schutz, A. "Collected Papers I" Nijhoff, 1962, pp. 67～96.
- 21) Schutz, A. "The Structures of Life World" Northwestern Univ. Press. 1973.
- 22) "Der Sinnhafte Aufbau der sozialen Welt. Suhrkamp. 1974.
- 23) 矢谷慈国「多元的リアリティをめぐる(Ⅰ)」『追手門学院大学文学部紀要』No. 15. 1981. pp. 75-80.
- 24) 市川①, pp. 62～64.
- 25) 拙稿②, pp. 41～45.
- 26) 市川①, p. 100.
- 27) シュトラッサー, 前掲書, pp. 94～95.
- 28) バーガー, ルックマン前掲書。
- 29) ブランケンブルク, W. 『自明性の喪失——分裂病の現象学——』, 木村他訳, みすず書房, 1978. には、日常生活を生きる健全な我々がほとんど気づくことなく前提にしている相互主観的なリアリティの「自然な自明性」の体験基盤が、ある種の精神分裂病では喪失され、その症状や訴えが、逆に我々が自覚しないでもっている「自然な自明性」「相互主観的なリアリティ感覚」の層を気づかせてくれるということが論じられている。
- 30) ブーバー, M. 『我と汝・対話』, 植田訳, 岩波文庫, 1979.
- 31) Schutz は相互主観性の成立する領域はムンダーンな日常生活世界においてであって、Husserl の『デカルト的省察』における「相互主観性の超越論的主観性内部での構成」の試みが、失敗であることを論じている。
Schutz, "The Problem of transcendental Intersubjectivity in Husserl" in Collected Papers III. Nijhoff. 1970.
- 32) 拙稿①, pp. 76～77.
- 33) Schutz. 注22) の文献 pp. 92—93.
- 34) イリイチ, I. 『脱病院化社会』, 金子訳, 昌文社, 1979.
- 35) 山本哲士, 『学校・医療・交通の神話』, 新評論, 1979.
- 36) ファスト, J. 『ボデーランゲージ』石川訳, 三笠書房, 1985.
- 37) 坂本賢三, 前掲書, pp. 192～201.
- 38) Schutz, 注21) の文献, pp. 85-88.
- 39) ヤスパース, K. 『大学の理念』, 森訳, 理想社, 1955.
- 40) 筆者の考える「エポケー」については、「超越論的ということ、あるいは現象学的還元 (エポケー) について——社会学の立場から——」『追手門学院大学二十周年記念論文集, 文学部編』所収, 1987, において詳細に論じる予定であるので参照されたい。